

介護過程展開における実習課題の達成度と実習の充実感との関係 －個別援助技術実習と介護総合実習の比較検討－

The relation between the degree of achievement of the training subject in
care process deployment and the sense of fulfillment of training
－ The comparative examination of individual assistance technical training and care synthesis training －

尾台 安子 赤沢 昌子 丸山 順子
Yasuko ODAI Masako AKAZAWA Junko MARUYAMA

要旨

平成 20 年から新カリキュラムの介護福祉士養成教育が実施されてきている。実習時間の変更はないが、介護過程を展開することが義務付けられている。本学では介護過程展開の実習を以前より行ってきているが、より効果的な実習ができるように、事前に実習計画書を作成して実習に臨むようにしてきたことの効果、実習目標の達成度、実習の充実感への影響要因について調査を行い、個別援助技術実習と介護総合実習の比較検討を行った。その結果、「1) 実習は、段階を踏んで効果が上がり、充実した実習になっている。2) 学生や指導者らが、実習課題を理解している必要があり、実習課題を意識できれば日々の行動目標・行動計画に活かしていくことができる。3) 事前の実習計画書作成は、実習課題の意識化につながり、学生の自主性につながる。4) 介護過程の展開で困っていることは、初期の情報収集の段階である。この時期のフォローが必要になる。5) 実習のやりやすさ、充実感には、介護技術の丁寧な指導が関係しており、職員の明るく話しやすい雰囲気の影響する。また、日々の反省会の有無が大きく影響する。」ことがわかった。

【キーワード】 実習目標 実習課題 実習計画書作成 介護過程展開 実習の充実感

はじめに

介護福祉士の養成教育の大幅な見直しが行われ、平成 20 年から新カリキュラムとなった。実習は、介護実習Ⅰと介護実習Ⅱに分けられた。介護実習Ⅰにおいては、在宅サービス関係の通所生活介護やグループホーム等のさまざまな介護現場を体験する実習となっており、介護実習Ⅱでは、介護過程を展開する実習となった。介護施設における実習指導者は指導者講習を受け、また研修計画や指導マニュアルが作成されていることが求められ、一定人数の介護福祉士資格を有する職員がいなくてはならないとなっている。施設実習においては実習の質の向上が期待されるものになっている。全体の実習時間数には変更はないが、幅広く介護の現場から学ぶことが求められている。介護福祉実習（以後、実習とする）においては、利用者を全人的に捉え、利用者主体の生活の自立支援につながる介護過程を展開できるように、介護実習を段階的に積み上げ到達できるようにしている¹⁾。

介護実習の学生の学びには大きなものがある。そこで、学生の学びを実習目標との関係性からとらえ、実習目標の達成度について調査し、段階を踏んで学びが深まっているのかを検証するとともに、実習のしやすい環境整備をするために各実習終了後にアンケートを実施したので報告する。

<言葉の定義>

「実習課題」という言葉は、実習要項に書かれている実習目標と、実習するにあたって重点的に行なう内容等を含むこととして使用する。行動目標、行動計画、実習計画書作成、ラベルの記入、プロセスレコードの記入等を含む。

1. 介護実習Ⅱの実習日数と時期

介護実習Ⅱは、個別援助技術実習・介護総合実習からなる。介護実習Ⅱにおいては、特に介護過程を展開する実習であり、個別援助技術実習を修了後に介護総合実習に進むことができるとしてある。

実習時期としては、個別援助技術実習は、6月に17日間行ない、介護総合実習は、11月後半から12月にかけて23日間の実習を行なっている。

2. 研究目的

介護実習Ⅱにおける個別援助技術実習と介護総合実習の実習課題の達成状況を明らかにして、実習内容を検討する基礎的資料にする。また、実習のしにくさ、しやすさから実習充実感との関係を捉え、実習教育環境の整備の一助とする。

3. 研究方法

1) 調査方法

平成 24 年度個別援助技術実習と介護総合実習終

了後の介護総合演習の時間を利用して、質問紙法で無記名のアンケート調査を実施する。

2) 調査対象者 平成 24 年度介護福祉学科 2 年生 58 名

3) 調査内容

調査内容としては、①日々の行動目標、行動計画について ②事前の実習計画書の作成について ③介護技術の習得状況 ④利用者との関わりについて ⑤介護過程の理解 ⑥実習のしやすさ、しにくさについて（尾台らが平成 15 年度に実施した調査内容を参考にする 2)）⑦その他（自由記述）について調査する。

4) 分析方法

SPSS17.0 for Windows を用いて集計を行い、各項目について記述集計を行う。

個別援助実習と介護総合実習の比較検討：実習要項の実習目標に照らし合わせて、33 項目についての質問を 4 段階（4：できた 3：だいたいできた 2：ややできない 1：できない）で調査した。その項目ごとの平均値を出して、内容別に並び替えて t 検定により有意差の検討（ $p < 0.05$ ）を行った。

実習内容と実習のやりやすさ・やりにくさは、ク

ロス表を作成し、単変量解析で有意差（ $p < 0.05$ ）の検討を行った。また介護総合実習での自由記述については内容をもとにカテゴリー化して整理した。

4. 倫理的配慮

調査用紙は無記名とし個人を特定できないこと、統計的に処理し本研究以外に使用しないこと、協力は個人の自由であること、また協力をしないことで不利益が生じないことを明記して、更に実施する前に十分説明した上で協力依頼をする。

5. 結果

1) アンケート回収率

個別援助技術実習終了後 98.3%（57/58 人）介護総合実習終了後 89.7%（52/58 人）

2) 調査内容 33 項目の個別技術実習と介護総合実習の比較

実習要項の実習目標に照らし合わせた 33 項目についての、t 検定を行った内容を表 1 に示す。さらに内容別にして比較検討した。

表 1 個別援助技術実習と介護総合演習の比較検討

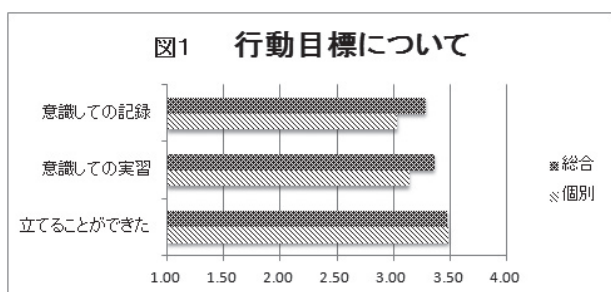
	n=57		n=52									
	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合
	@1積極的		@2充実感		@3目標立てる		@4目標意識		@5目標意識しての記録			
平均値	3.21	3.37	3.37	3.58	3.49	3.48	3.14	3.37	3.04	3.29		
標準偏差	0.559	0.561	0.587	0.537	0.601	0.727	0.693	0.658	0.778	0.667		
F 値	1.614		0.475		1.276		0.392		0.14			
有意確率 (両側)	0.152		0.056		0.935		0.086		0.072			
	@6行動計画立てる		@7計画指導者に伝える		@8記録提出		@9ラベル実習中に書く		@10実習文献とつながっている			
平均値	3.23	3.38	3.09	3.38	3.37	3.69	2.47	3.25	3.11	3.04		
標準偏差	0.682	0.599	0.662	0.631	0.919	0.612	0.984	0.837	0.772	0.791		
F 値	0.165		1.504		10.826		2.2		0.175			
有意確率 (両側)	0.208		0.019 *		0.034 *		0.000 **		0.657			
	@11計画書の活用		@12計画により経験が明確		@13計画により目標に活用		@14計画により積極的		@15達成度の理解			
平均値	2.82	2.94	2.86	3.1	2.88	3.08	2.89	3.19	2.81	3.21		
標準偏差	0.826	0.916	0.693	0.721	0.758	0.737	0.748	0.627	0.718	0.696		
F 値	1.36		0.002 *		0.368		1.416		0.112			
有意確率 (両側)	0.482		0.084		0.167		0.027 *		0.004 *			
	@16計画の修正		@17技術の習得		@18技術習得は学内の学びが役立った		@19関わりに自信		@20利用者信頼関係			
平均値	2.86	3.1	3.21	3.48	3.12	3.5	3.44	3.67	3.42	3.65		
標準偏差	0.766	0.799	0.674	0.61	0.781	0.577	0.682	0.513	0.653	0.48		
F 値	0.007 *		0.007 *		0.377		9.597		10.362			
有意確率 (両側)	0.118		0.03 *		0.005 *		0.047 *		0.038 *			
	@21思いに気づく		@22適したコミュニケーション		@23プロセスレコードで振り返り		@24介護過程の理解		@25情報収集			
平均値	3.3	3.46	3.33	3.58	2.95	3.52	3.19	3.46	3.07	3.37		
標準偏差	0.731	0.503	0.664	0.537	0.875	0.7	0.581	0.541	0.799	0.627		
F 値	8.974		2.832		1.093		1.492		0.569			
有意確率 (両側)	0.181		0.039 *				0.014 *		0.035 *			
	@26利用者の望ましい生活		@27根拠の明確		28課題		29長期目標		30短期目標			
平均値	3.02	3.37	3.04	3.37	3.09	3.44	3.21	3.46	3.46	3.21		
標準偏差	0.641	0.561	0.706	0.561	0.689	0.539	0.647	0.609	0.609	0.619		
F 値	1.822		0.004 *		0.002 *		0.304		2.661			
有意確率 (両側)	0.003 *		0.008 *		0.003 *		0.04 *		0.063			
	31総合的援助方針		32過程の記録		33指導体制のやりやすさ							
平均値	3.12	3.35	2.96	3.25	3	3.31						
標準偏差	0.683	0.653	0.654	0.622	0.906	0.755						
F 値	0.594		0.978		0.078							
有意確率 (両側)	0.085		0.022 *		0.058		* $p < 0.05$	** $p < 0.001$				

(1) 日々の実習の行動目標・行動計画について

介護実習を行うにあたり、日々の実習目標として行動目標、行動計画を立てて臨むことにより、介護総合実習の中で事前指導を行っている。記録用紙には、行動目標を意識して書くことができるように工夫してある。

行動目標の平均値だけでみると、行動目標を立てることは各実習の差はあまりないが、目標を意識して実習や記録をしているかの平均値は減少している。個別援助技術実習方が減少傾向は大きい。

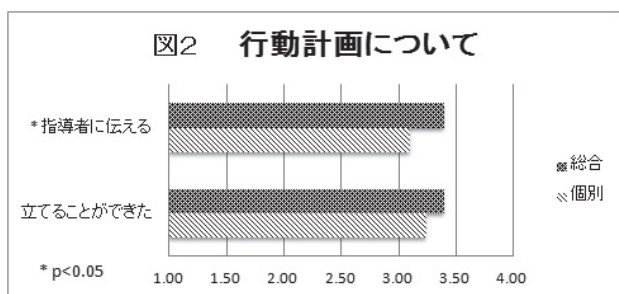
(図1 行動目標について)



行動計画については、目標に取り上げたことを実践するために必要なことであり、それを指導者に伝えて実践することとなる。行動目標と行動計画の平均値の比較してみると、行動計画を立てることが低くなっている。

また、介護総合実習においては、個別援助技術実習より行動目標、行動計画ともに意識化され、指導者に伝えることができていることになる (p < 0.05)。

(図2 行動計画について)

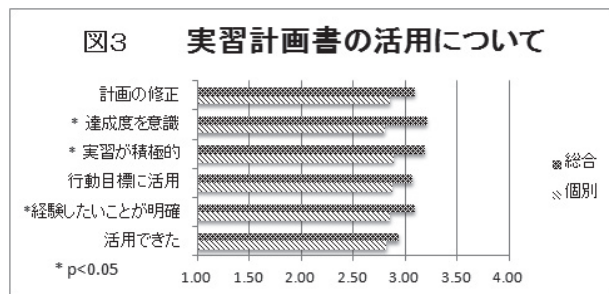


(2) 実習計画書の作成が実習全体に対する影響について

実習計画書は日々の行動目標に活用され、計画の達成度を意識して実習を行い、実習を積極的に行うことにつながっており、経験したいことが明確になったとしている。また、総合実習においては、全ての項目において個別援助技術実習よりは実習計画書の活用がなされている。「実習計画の達成度を意識した」「実習計画を立てたことにより実習が積極的にできた」「実習計画を立てたことにより経験

したいことが明確になった」の3項目は、介護総合実習で有意に高くなっている (p < 0.05)。

(図3 実習計画書の活用について)

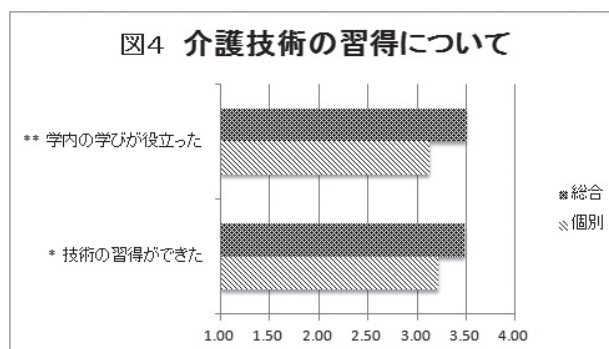


(3) 介護技術の習得について

個別援助技術実習では、基本的な介護技術を学内で修了していることから、介護過程を展開することの他に介護技術の習得にも重点が置かれる実習である。また最後の実習となる介護総合実習では、就職ということも考えて介護技術習得に力がある面がある。

介護総合実習においては、介護技術習得については、「学内の学びが役立った」「介護技術の習得ができた」が、有意に高くなっている (p < 0.05 ~ 0.001)。

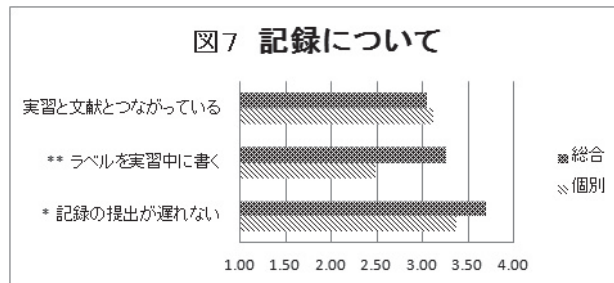
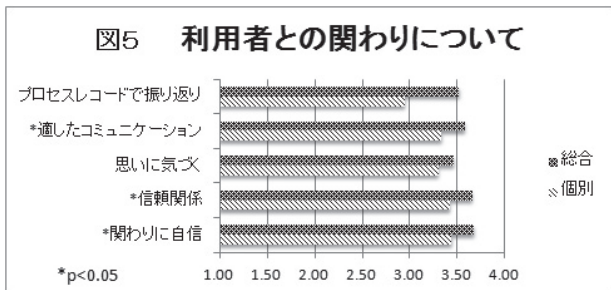
(図4 介護技術の習得について)



(4) 利用者との関わりについて

介護過程を展開していくにあたっては、利用者とのより良い人間関係がベースになればならない。より良い人間関係を形成できることが大切になる。そこで利用者との関係を見てみたところ、介護総合実習では全てにおいて平均値は高くなっており、「適したコミュニケーションとることができた」「信頼関係ができた」「利用者との関わりに自信をもつことができた」が、有意に高くなっている (p < 0.05)。

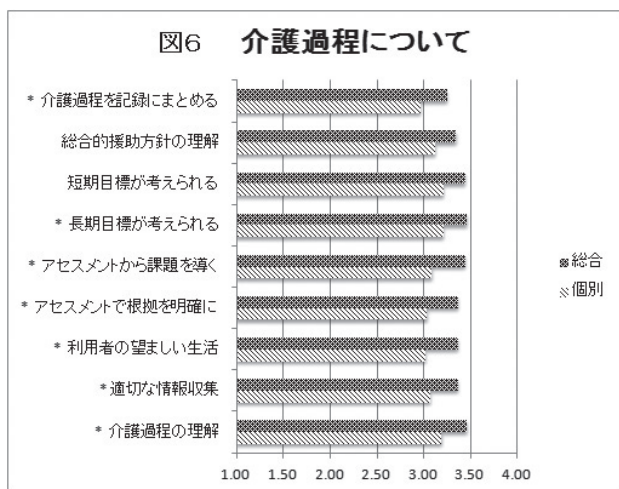
(図5 利用者との関わりについて)



(5) 介護過程の展開について

介護過程の展開について、介護総合実習ではすべての項目において平均値は高くなっている。「適切な情報収集ができた」「アセスメントで利用者の望ましい生活が考えられた」「アセスメントで原因や根拠を明確にできた」「課題を導き出すことができた」「長期目標を考えることができた」「介護過程を記録としてまとめることができた」の7項目において、介護総合実習のほうが有意に高くなっている (p < 0.05)。

(図6 介護過程について)



(6) 記録について

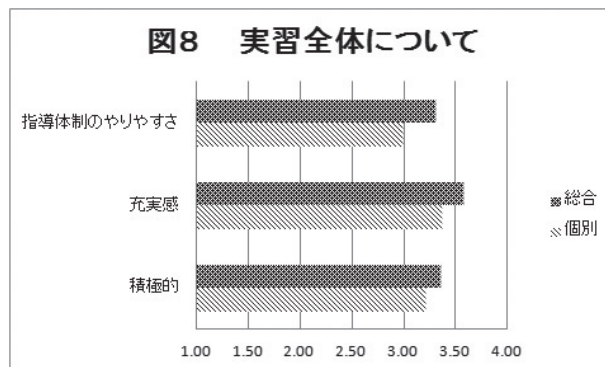
実習記録を毎日きちんと書いて実習の振り返りをする事は重要であることから、実習記録としてA3用紙が2枚ある。その中に日々の実習の中で学ぶ知識を確かなものにするために、文献から調べて書く項目を入れてある。文献から調べたことが実習内容とつながっていることが望ましいが、介護総合実習での平均値が個別援助技術実習より低くなっている。「ラベルを実習中に書くことができた」「実習記録の提出が遅れることなくできた」の2項目については、介護総合実習で優位に高くなっている (p < 0.001 ~ 0.05)。

(図7 記録について)

(7) 実習全体について

実習が積極的にできたか、充実していたか、やりやすさはどうだったかを明らかにしたものである。実習の指導体制のやりやすさについては、標準偏差が大きいため施設においてのばらつきを示している。やりやすい施設とそうでない施設があることになる。

(図8 実習全体について)



3) 実習内容と実習のやりやすさ・やりにくさの関係

実習内容33項目と実習のやりやすさ・やりにくさの関係を、t検定を行った。個別援助技術実習と介護総合実習ともに有意差のあるものを表2より拾い出し、やりやすさ・やりにくさとの関係を見た。また、実習を行う上での学生の意識に関する「積極性」と「充実感」についての関係性をみた。

(1) 実習内容と実習のやりやすさとの関係について

①実習の充実感をもたらすことには、「介護技術を細かに指導してくれる」ことと関連している (p < 0.05)。

②介護技術の習得には、「実習のスケジュールが決まっている」ことが関係している (p < 0.05)。また、学内で学んだことが役立つためには、「介護技術を細かに指導してくれる」が関係している (p < 0.05)。

③実習の指導体制のやりやすさは、「職員の明るさ」が影響している (p < 0.05 ~ 0.001)。

(2) 実習内容と実習のやりにくさとの関係について

①実習について施設の職員が理解していないと、学生たちは行動計画を指導者に伝えることができず

にいる (p < 0.05)。

②実習計画書の修正にあたっては、「実習評価が厳しい」と修正できにくくしている (p < 0.05)。

③実習スケジュールが決まっていなと、利用者との関わりに自信をもつことに影響する (p < 0.05)。

④実習の指導体制のやりにくさは、反省会をもってもらえるかが影響していることがわかった (p < 0.001 ~ 0.05)。

(表2 個別援助技術実習と介護総合実習の実習内容と実習のやりやすさ・やりにくさの関係)

表2 個別援助技術実習と介護総合実習の実習内容と実習のやりやすさ・やりにくさの関係

	①		②		③		④		⑤		⑥		⑦		⑧		⑨		⑩		⑪		
	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	
実習がやりやすかった理由	その日の指導担当者が決まっている																						
	実習のスケジュール決まっている																						
	行動計画を申し出ると優先的に実践																						
	積極的に申し出ると考慮																						
	介護技術を細かに指導																						
	ケアプランについてアドバイス																						
	質問にいけないに答える																						
	職員明るい																						
	職員が話しやすい																						
	職員全体が実習を理解																						
毎日反省会あり																							
施設の実習評価が厳しくない																							
実習がやりにくかった理由	その日の指導担当者が決まっていない																						
	実習のスケジュールが決まっていない																						
	実習指導者が不在の時が多い																						
	職員が忙しすぎて声がかけにくい																						
	実習体制が違ってやりにくい																						
	実習を職員が理解していない																						
	行動計画を申し出てもやらせてもらえない																						
	人によって指導内容が違う																						
	指導担当者に放っておかれる																						
	職員全体が実習を理解していない																						
	質問しても答えが返ってこない																						
	実習の課題が理解されていない																						
	反省会をもってもらえない																						
施設の実習評価が厳しい																							

* p<0.05 ** p<0.001

	⑫		⑬		⑭		⑮		⑯		⑰		⑱		⑲		⑳		㉑		㉒		
	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	
実習がやりやすかった理由	その日の指導担当者が決まっている																						
	実習のスケジュール決まっている																						
	行動計画を申し出ると優先的に実践																						
	積極的に申し出ると考慮																						
	介護技術を細かに指導																						
	ケアプランについてアドバイス																						
	質問にいけないに答える																						
	職員明るい																						
	職員が話しやすい																						
	職員全体が実習を理解																						
毎日反省会あり																							
施設の実習評価が厳しくない																							
実習がやりにくかった理由	その日の指導担当者が決まっていない																						
	実習のスケジュールが決まっていない																						
	実習指導者が不在の時が多い																						
	職員が忙しすぎて声がかけにくい																						
	実習体制が違ってやりにくい																						
	実習を職員が理解していない																						
	行動計画を申し出てもやらせてもらえない																						
	人によって指導内容が違う																						
	指導担当者に放っておかれる																						
	職員全体が実習を理解していない																						
	質問しても答えが返ってこない																						
	実習の課題が理解されていない																						
	反省会をもってもらえない																						
施設の実習評価が厳しい																							

* p<0.05 ** p<0.001

		(23)	(24)	(25)	(26)	(27)	(28)	(29)	(30)	(31)	(32)	(33)		
		きりコ た返 りド がで て振し	た理介 解護 が適 で程 きの	た適情 切報 に収 で集 きが	たをま 考し用 えい者 ら生 れ活望	に根 拠を きを た明 確	たこ課 と題 がを 出す で	が考長 でえ期 できる 目標 とを	が考短 でえ期 できる 目標 とを	きた方 たを針 合とを 的 が考援 でえ助 ける	とま記 録とを 的 とを 的 とを	かや指 つり導 たや体 制 す制 が		
		個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	個別	総合	
実 習 が や り や す か っ た 理 由	その日の指導担当者が決まっている													
	実習のスケジュールが決まっている		*											
	行動計画を申し出ると優先的に実践													
	積極的に申し出ると考慮				*	*	*							
	介護技術を細かに指導											*		
	ケアプランについてアドバイス						*							
	質問にいてねいに答える	*												
	職員明るい												*	**
	職員が話しやすい												*	
	職員全体が実習を理解												*	
毎日反省会あり												*		
施設の実習評価が厳しくない												*		
実 習 が や り に く か っ た 理 由	その日の指導担当者が決まっていない												*	
	実習のスケジュールが決まっていない		*		*									
	実習指導者が不在のことが多い											*		
	職員が忙しすぎて声がかけにくい						*				*	*		
	実習体制が違ってやりにくい		**											
	実習を職員が理解していない							*				*		
	行動計画を申し出てもやらせてもらえない				*		**					*	**	
	人によって指導内容が違う													
	指導担当者に放っておかれる													
	職員全体が実習を理解していない					*								
質問しても答えが返ってこない														
実習の課題が理解されていない											*	**		
反省会をもってもらえない										*	**	*		
施設の実習評価が厳しい					*							*		

* p<0.05 ** p<0.001

(3) 実習のやりやすさ・やりにくさと「積極性」「充実感」の関係

① 「積極性」との関係

個別援助技術実習では、実習のやりやすさの「積極的に申し出ると考慮してもらえ」「行動計画を申し出ると優先的に実践」が、積極性に関係している。介護総合実習では、「職員全体が実習に理解をしている」ことが関係している。

実習のやりにくさでは、個別援助技術実習としては「実習評価が厳しい」ことが積極性に関係する。介護総合実習になると「職員全体が実習に対して理解していない」「職員が忙しすぎて声がかけにくい」「指導担当者に放っておかれる」が積極性に影響を与える。

② 充実感との関係

実習のやりやすさについては、前述したように「介護技術を細かに指導してくれる」は学生たちにとって大きなことになっている。介護総合実習との関係では、「行動計画を申し出ると優先的に実践できた」「積極的に自分から申し出ると考慮してもらえた」「質問にいてねいに答えてくれた」「職員が明るい」「職員全体が実習に対して理解してくれていた」が充実感と関係している (p < 0.05) 。

実習のやりにくさとの関係では、「実習スケジュールが決まっていない」「施設の中での実習の指導体制の違い」「職員が忙しすぎて声がかけにくい」「職員全体

が実習に対して理解していない」「指導担当者に放っておかれる」といったことが充実感に影響を与える。

4) 介護総合実習での自由記述から

(1) アセスメントで困ったこと

アセスメントで困ったこととして最も多かったのが情報収集であった。利用者との関係づくりも最初の頃は試行錯誤で関わりをしていく中でのことで、思うように情報が集められないことの焦りが感じられる。「利用者から情報を引き出せない」「難聴があり大きな声で情報収集するのをためらった」「生活歴を聞いても話がつながらずうまくいかなかった」等との記述がある。そして、アセスメントの中で、得た情報と情報を関連付け、解釈をして課題を出していく過程はアドバイス等の指導が入るので、困ることは少ないという結果であった。

表3 アセスメントで困ったこと

情報収集	・利用者の状況で情報が取りにくい	15 (件)
	・時間がない	5
	・認知症の人の情報収集が難しい	4
	・利用者の思いを知ることの困難さ	4
	・職員が教えてくれない	2
	・記録からの情報が少ない	2
情報の解釈の難しさ		3
課題の明確化の難しさ		2

(2) ケアプランの実施で困ったこと

実施時で困ったことは、計画を行おうとした時に、利用者の体調や気分の変化がみられ、思うように行うことができなかつた。また、学生自身の準備や打ち合わせ不足で思わぬ展開になってしまい、計画したことが実施できなかつた。また、施設側の協力体制が取れず困っていた。

表4 ケアプランで困ったこと

利用者の状況からの困難性	14 (件)
実施するにあたっての準備不足	10
実習施設側の協力体制がとれず困難	5
その他	1

(3) 利用者との関わりの中で悩んだり困ったこと

介護の実際場面での利用者の対応で悩むことが多く、時間がかかるため「あなたにはやってほしくない」と言われどうして良いのかわからなかつた。また、食べ物を勧められて困ったなどの記述があつた。コミュニケーションでは、ことばが不明瞭で相手の言うことがわからず困った、会話が続かないことや話題に困っている。

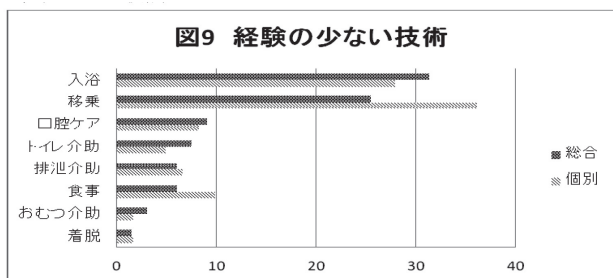
表5 利用者との関わりで悩んだり困ったこと

利用者への対応	16 (件)
コミュニケーションをとることの難しさ	10
認知症の人への接し方	6
利用者の思いを汲み取る困難さ	5

5) 介護技術の経験度

介護技術の経験についてはチェックリストをつくり、一通りのことを経験できるようにしている。入浴、移乗については経験が少ない技術になっている。

(図9 経験の少ない技術)



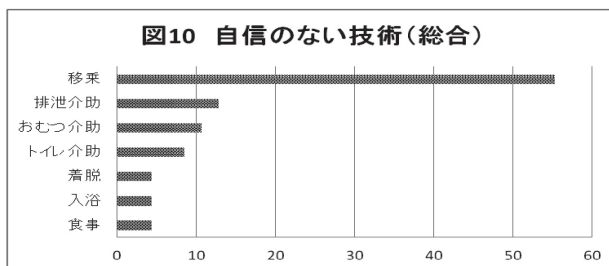
6) 自信がもてない技術

自信のない技術としては経験が少ない移動技術が最も多い。これは施設側においても転倒というリスクが出てくるため、学生に実施させないところが多

いことが影響している。

排泄関係の技術においては毎日行われているが自信がもてない技術になっている。

(図10 自信のない技術)



6. 考察

2年次において行われる介護実習Ⅱの個別援助技術実習と介護総合実習の比較した結果を考察する。

1) 実習内容の積み重ねの効果と課題

介護総合演習において、実習に臨むにあたって有意義な実習になるように事前準備、事後指導を行っている。実習要項に基づいて、実習における行動目標、行動計画を立てることの意識づけを行い、実習に送り出している。また実習記録についても、実習目標を意識して、効果的な実習ができるようにと配慮して作成してある。これらのことを踏まえ、実習における学生の学びで明らかになったことは、2年次になっての介護過程を展開する長期の実習では、確実に実習効果が高められていた。日々の行動目標、行動計画については意識化され、そのことを指導者に申し出て実践できることで実習の充実感につながっていた。

平成15年に学生の意識調査を行った中で、実習の課題があいまいなままに実習をしていた学生が半数近くいたが³⁾、実習の日々の行動目標や行動計画が立てられ、介護総合実習での達成度の方が高い状態であった。

実習課題については、実習要項を施設にも配布して理解に努めてはいるが、実習施設では、各養成校の実習課題を把握することは困難を極め、職員全体に実習を理解してもらうことができていない。実習のやりにくさには、職員が学生の実習について関心が薄く理解していないことや職員の雰囲気の影響を与えている。辻、小林は、実習指導者の視点から、「指導者は学生の実習課題を理解して目標に向かって指導を行うことが求められている役割である」としている⁴⁾。実習においては、学生自身が実習課題を意識することはもとより、実習指導者らが学生の実習課題を意識し、目標達成のために配慮していくことが必要である。そのためには実習指導者と教員の連携が重要であり、実習における到達目標を共有する

ことが大切である。できるだけ指導者と教員間で、学生が実習をやりやすくしていく努力をしていく必要がある。

2) 実習計画書の作成の効果

介護過程を展開する実習では、長期間の実習になるため、事前に実習全体を通しての実習計画書を作成させている。施設でのオリエンテーション時に実習計画書をもっていき、自分たちの計画を調整することになっている。実習は学生自らが学ぼうとする姿勢が重要と考え、実習計画書の作成を行っており、活用して日々の行動目標や行動計画への活用を期待している。実習計画書の作成は、事前に実習施設の様子がわからないままに行うが、実習要項に実習スケジュールの例を提示してあるため、それを参考にしつつ自分が何を学びたいかを考え、加えることにしている。そうすることで学生自身が実習全体の流れを把握できる。

事前の実習計画書作成は、実習の段階を重ねるほど、学生の実習への取り組みに対して効を奏している結果となった。実習施設の様子がわからない状態ではあるが、実習課題に沿って実習スケジュールを自分の手で仕上げていくことで、実習課題が学生の頭に入り、日々の行動目標や行動計画につながっていく。そのことが学生の実習に対する自主性となり、目標達成のために指導者に申し出ることになり、指導者もそれを受けて実施できるように配慮してくれる。そのことにより学生の実習に対する充実感となり、楽しかったとなる。伊藤は、「実習プログラムを作成することは、実習指導者が学生の実習目標やこれまでの学びの確認ができる」としている⁵⁾。学生によっては実習要項を参考にするため、要項に沿った実習計画書になってしまう部分があるので、学生自身の実習目標も打ち出せるような指導をしていくことが、今後必要になると考えている。

3) 介護過程展開の課題

介護過程を展開することは、新カリキュラムにおいての大きな変更点である。介護過程の講義時間が150時間とあり、介護実習においては介護過程を実践することになる。学内のペーパーシミュレーションの事例での理解を、実習では更に確実な知識にしていくことができている。介護過程の講義があつての理解であるが、アセスメント過程の中で、根拠性を明らかにすることや利用者の望ましい生活が考えられ、課題を導き出している。2回の実習で介護過程を展開することで、より理解が深められている。介護過程の記録についてもどう書いて良いかわからなかったものが、介護総合実習では記録についての

戸惑いはなくなっている。しかし、学生たちが苦勞していたことは、情報収集であった。利用者の状況により、把握しなければならない情報が得られない、職員に聞いても自分で情報をとるようになると言われる、質問攻めみたいになってしまい利用者の気分を害してしまったなどがあげられていた。そして利用者の思いを引き出すことに困っていた。利用者との関わりについては、概ね良好な人間関係を形成できており、信頼関係を築き、利用者との関わりに自信を持つことができていた。実習が終了する頃には利用者との良好な関係が形成できるが、介護過程展開の情報収集の段階では、実習に入って1～2週目ということも影響していたことであろう。しかし、この時のフォローが必要になるということを指導者及び教員は自覚をする必要がある。実習時の学生の不安には、「介護過程の展開をはじめとした知識・技術の不足に起因する⁶⁾」と横山は分析している。介護過程を展開するにあたって、アセスメントの思考過程で困るのかと考えていたが、利用者との関係づくりの初期の段階で困っていた。アセスメントに必要な情報を得なければならないが思うように得られない不安と困惑が自由記述に書かれていた。介護過程の展開では、この情報収集の段階での配慮が必要であることがわかった。

4) 実習内容から見た実習のやりやすさ・やりにくさ・充実感との関係

実習のやりやすさに影響を与えるものは「介護技術を細かに指導してもらえる」であることが明らかにされた。介護技術は、生活支援をする中で必要になってくるものであり、毎日の生活の基本を支えるものである。そして、学生は実習を終了して数ヵ月後には就職をしていく状況にある。介護技術の習得は必要不可欠のものであるからこそ、技術に対して細かに教えてくれることを求めている。介護技術の習得には、職員の明るく話しやすい雰囲気に関係してくる。そして、質問に対してていねいに答えてくれることが、実習の充実感ややりやすさに影響する。これは、平成23年に行った調査においても、同様な内容が実習の充実感ややりやすさに影響していることが明らかになっており、平成15年よりかなり改善がみられていた⁷⁾。今回は、実習内容の介護技術の習得には、職員の雰囲気や丁寧な指導が影響していることや学内の学びが技術習得には役立つことが明らかになった。

また、学生の不安を軽減させ実習効果を上げるためには、「実習先の職員と学生とのより良い関係作りの介入が必要である⁸⁾」と伊藤は述べている。学生の実習には、指導者だけではなく、施設職員全体

が影響を与える。実習を受け入れる施設職員全体でこのことを共有することが必要になる。学生が自主的に申し出たことに対して配慮してもらえことや、現場の職員が実習を理解して質問に答えてくれることが求められる。

さらに、学生が萎縮することなくのびのびと実習ができるためには、実習指導者の存在は大きい。何よりも日々の実習の反省会の有無が、大きく実習のやりやすさに影響することも自覚することが必要になる。今後養成校として指導者に対して、日々の反省会の重要性をさらに説明していきたいと考えている。

7. 結論

個別援助技術実習と介護総合実習とを比較検討した結果、確実に知識・技術の積み上げができていた。また、実習に臨むにあたって事前に準備する実習計画書の作成の効果が明らかにされた。また、実習をやりやすくするための要因の関係も明らかにされ、下記の内容にまとめることができる。

- 1) 実習は、段階を踏んで効果が上がり、充実した実習になっている。
- 2) 学生や指導者らが、実習課題を理解している必要があり、実習課題を意識できれば日々の行動目標・行動計画に活かしていくことができる。
- 3) 事前の実習計画書作成は、実習課題の意識化につながり、学生の自主性につながる。
- 4) 介護過程の展開で困っていることは、初期の情報収集の段階である。この時期のフォローが必要になる。
- 5) 実習のやりやすさ、充実感には、介護技術の丁寧な指導が関係しており、職員の明るく話しやすい雰囲気が影響する。また、日々の反省会の有無が大きく影響する。

引用文献・参考文献

- 1) 平成23年介護実習要項 松本短期大学介護福祉学科 6
2011年
- 2) 尾台安子、山下恵子：介護福祉実習における学生の意識と課題
松本短期大学紀要第13号 1～9 2004年
- 3) 前掲2
- 4) 辻智典、小林大介：介護実習施設における実習生の受け入れ態勢の現状と課題－実習指導者の視点から－ 介護福祉士
13号 29～35 2009年
- 5) 伊藤裕子：介護福祉実習における実習指導者と養成校教員の連携のとらえ方－インタビューの語りの分析－ 龍谷大学紀要第32巻第1号 91～93 2010年
- 6) 横山さつき：介護実習における学生の不安に関する因子分析的研究 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要第9号

125～133 2008年

- 7) 丸山順子、尾台安子他：介護基礎実習における学生の実習姿勢と実習指導体制との関連性 松本短期大学紀要第20号
83～93 2011年
- 8) 前掲5